

〈研究ノート〉

回想法への期待

——実践研究から考える文献展望——

津 田 理 恵 子*

The expectations to the life review

——The literature review to think of from the action-training-research——

Rieko Tsuda

要旨：本稿の目的は、回想法の実践研究における 26 件の文献を基に、実践方法、対象者、評価方法、効果について整理し、回想法実践における展望を導き出すことである。回想法の効果としては、認知機能面、精神機能・感情面、身体機能・行動面に効果があることが明確になった。その上で、支援者・対象者・評価・賦活化された機能の 4 点について展望を導いた。回想法実践によって検証されていない面は多く、無限の可能性が秘められていることが明らかになった。

Abstract : The purpose of this article is the derivation of review in case of life review practice, organizing about the way of practicing, the object, the evaluation method, the effect based on 26 pieces of literature on the action-training-research of the life review.

As the effect of the life review, that there was an effect in the recognition functionality, and feeling surface, the body feature and action surface became clear.

It found out a view about four of the practice person, the objects, the evaluation and the features which were made activation.

There were many surfaces which aren't verified by the life review practice.

The possibility of life review for working the elderlies is considered infinite.

Key words : 回想法 life review 実践研究 The practice-research 対象者 The object 調査 The investigation

I 序 論

回想法は、1963 年にアメリカの精神科医 Butler¹⁾によって提唱された理論で、かつて高齢者が行う過去への回想は、現実からの逃避や過去への回帰のような病理現象であると否定的に捉えられていた。しかし、Butler は高齢者の回想

を、人生の発達段階の最終課題である死に直面したときに無意識的に起こる、誰にでも見られるごく自然な行為であり、過去の未解決の問題を再度考え直すことを導く、積極的な役割を持つもので、回想は防衛機能の低下の症状でもあると同時に、成長と変化を示唆する積極的意味をもつものであると位置づけた。その後、欧米

*関西福祉科学大学大学院社会福祉学研究科臨床福祉学専攻 学生

を中心に回想法の実践や研究が行われている。

我が国においても 1992 年から、高齢者を対象とし、医療・福祉・保健・心理・リハビリテーションなど、多岐に渡る分野で回想法の実践が盛んになりつつある。

しかし、回想法実践において、実践方法、実践場所、対象者、評価方法は、研究者によってさまざまで、その手法は確立されているとはいえない。

そこで、回想法実践の先行研究を基に、回想法の対象者、実践方法、評価方法、効果について整理し、今後の展望を見出し、回想法実践において期待できる可能性を導きたいと考え、本研究に取り組んだ。

なお、日本における回想法という用語は、レミニセンス (remembrance) とライフレビュー (life review) という大きな枠組みの中で、それぞれの手法が存在していると捉えられており、それらは、回想法実践の目的や対象に合わせ、組み合わせられて活用されていることが多い。本稿では、ライフレビュー (life review) を広義の概念として捉え、レミニセンス (remembrance) と、狭義のライフレビュー (life review) を含んだ用語として、広義の回想法 (ライフレビュー: life review) を、回想法 (ライフレビュー: life review) とし使用する。

Ⅱ 我が国における回想法研究

我が国においては、1990 年代から回想法に関する研究が行われており、その枠組みは大きく 2 つに分けることができる。1 つには、用語や概念整理を目的とした基礎的研究と、もう 1 つには、回想法を用いた実践研究である。

2007 年 4 月 1 日現在、論文情報ナビゲーター国立情報科学研究所 (Cinii) による論文検索システムで、回想法というキーワードでヒットした数は、1991 年～2006 年 3 月 31 日の期間で合計 203 件あった (図 1)。

我が国では、野村 (1992)²⁾が特別養護老人ホームの入所者に回想法を実践した研究報告が

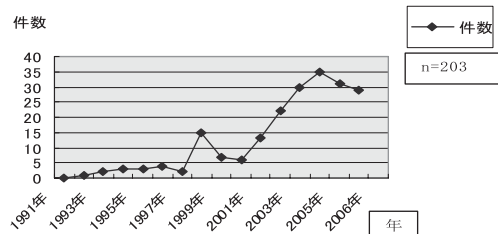


図 1 回想法の年代別論文件数

ら、回想法研究がスタートしている。その後、1997 年までの期間に、年間 1～4 件の研究報告があり、1998 年は 15 件、2000 年以降は、年間 20 件以上の報告となっており、2006 年は 29 件の論文報告があった。このように、回想法研究は、近年になってからその研究は盛んになってきている。

今回は、その中で実践研究について述べられていた 26 件「野村 (1992)、野村 (1993)³⁾、黒川 (1995)⁴⁾、森川 (1999)⁵⁾、内野・高橋・野村他 (2000)⁶⁾、花岡・西村・新宮 (2001)⁷⁾、黒川 (2002)⁸⁾、遠藤 (2003)⁹⁾、今野・植杉 (2003)¹⁰⁾、森・来島・小島 (2003)¹¹⁾、佐々木・上里 (2003)¹²⁾、梅本 (2004)¹³⁾、野村 (2004)¹⁴⁾、植杉・上田・村方 (2005)¹⁵⁾、佐藤・細川・田高・酒井他 (2005)¹⁶⁾、橋本・鈴木・紺野ら (2005)¹⁷⁾、梅本 (2006)¹⁸⁾、梅本・中島 (2006)¹⁹⁾、山村 (2006)²⁰⁾、茂木・三浦・金山・桑島他 (2006)²¹⁾、野村 (2006)²²⁾、野村 (2002)²³⁾、高橋・筒井 (2002)²⁴⁾、新田・神田・芦田他 (2002)²⁵⁾、安藤 (2005)²⁶⁾、軸丸・藤田・尾原 (2006)²⁷⁾」を基に、我が国における回想法研究の実状について、整理していく。

Ⅲ 実践研究について

1. 実践形態

(1) 実践形態

回想法実践における実践形態は、その目的に応じて、対象を個別とグループに大別することとができ、グループでは、クローズド・グループ、セミクローズド・グループ、オープン・グ

表1 実践形式の割合

n=26

実践形式	研究者	件数	割合
クローズド・グループ	野村（1992）、野村（1993）、黒川（1995）、森川（1999）、内野・高橋・野村他（2000）、花岡・西村・新宮（2001）、黒川（2002）、遠藤（2003）、今野・植杉（2003）、森・来島・小島（2003）、佐々木・上里（2003）、梅本（2004）、野村（2004）、植杉・上田・村方（2005）、佐藤・細川・田高・酒井他（2005）、橋本・鈴木・紺野ら（2005）、梅本（2006）、梅本・中島（2006）、山村（2006）、茂木・三浦・金山・桑島他（2006）、野村（2006）	21 件	81%
個別	野村（2002）、高橋・筒井（2002）、新田・神田・芦田他（2002）、安藤（2005）	4 件	15%
オープン・グループ	軸丸・藤田・尾原（2006）	1 件	4%

ループの3つのグループに分けることが出来る。

個別は、実践者と対象者が1対1で実践する方法で、オープン・グループは、回想法実践中に誰でも自由に参加出来る方法で、セミクローズド・グループは対象者の出入りがある程度自由な方法で、クローズド・グループは特定の決められた対象の人のみで行う方法である。先行研究26件の論文における、実践形態の内訳は、表1に示したように、クローズド・グループが最も多く81%を占めており、個別が15%、オープン・グループが4%であった。

(2) クローズド・グループの構成

クローズド・グループで実践していたグループの構成人数は、6人グループと8人グループが最も多く、全体の26%を占めており、続いて9人グループが15%、5人グループが12%、10人グループが8%、3人・7人・11人グループは4%ずつであった。

クローズド・グループで実践していたグループ内における男女構成は、男女混合が70%で最も多く、女性のみが24%、男性のみが6%となっていた。

2. 実践の間隔・時間・期間・回数

26件の論文における回想法実施の間隔、1回の実施時間、実施期間、実施回数をみると、最も多かったのは、1週間に1回、1回の実施時

間が60分で、2ヶ月間の期間に合計8回実施しているものが8件で最も多かった。次いで、1週間に1回、1回の実施時間が60分で、1ヶ月半の期間に合計6回で実施しているものが4件であった。

項目毎にみると、回想法の実施間隔では、1週間に1回実施しているものが最も多く、次いで2週間に1回の実施となっていた。1回の回想法実施時間は、60分が最も多く、実施期間と合計回数では、2ヶ月間に8回実施しているものが最も多かった（表2）。

3. 実践者の職種

(1) リーダーの職種・資格

回想法を実践しているリーダーの保有している資格・職種は、全体の32%が不明であった。明確に職種・資格を示していたもので最も多かったのは、教員で19%を占めており、次いで社会心理の専門家と作業療法士が15%、看護職が7%、心理療法士・介護職・精神科医が4%ずつとなっていた（図2）。

(2) コリダー・記録・運営を担っている者の職種・資格

コリダー・記録・運営を担っていた者の職種・保有している資格は、不明であった15件を除いて、介護職が最も多く42%で、看護職が19%、臨床心理士が14%、レクリエーションワーカーが10%、精神保健福祉士・作業療

表 2 回想法実施の間隔・時間・期間・回数

実施間隔	1 回の時間	期間	合計回数	研究者
週 1 回	30～50 分	2 ヶ月	9 回	安藤（2005）
週 1 回	45 分	2 ヶ月	8 回	山村（2006）
週 1 回	40～60 分	1 ヶ月	4 回	植杉・上田・村方（2005）
週 1 回	60 分	1 ヶ月半	5 回	野村（2002）、梅本（2004）
週 1 回	60 分	1 ヶ月半	6 回	森川（1999）、茂木・三浦・金山・桑島他（2006）、黒川（1995）、花岡・西村・新宮（2001）
週 1 回	60 分	2 ヶ月	8 回	野村（1992）、森・来島・小島（2003）、佐々木・上里（2003）、梅本（2006）、梅本・中島（2006）、佐藤・細川・田高・酒井他（2005）、遠藤（2003）、野村（1993）
週 1 回	60 分	2 ヶ月半	10 回	黒川（2002）
週 1 回	60 分	3 ヶ月	12 回	橋本・鈴木・紺野ら（2005）
2 週間 1 回	60 分			軸丸・藤田・尾原（2006）
2 週間 1 回	60 分	1 年		野村（2006）
2 週間 1 回	60 分	2 年		野村（2004）
週 2 回	60 分	3 ヶ月	25 回	内野・高橋・野村他（2000）
短期間				高橋・筒井（2002）
訪問看護提供時				新田・神田・芦田他（2002）
1 回				今野・植杉（2003）

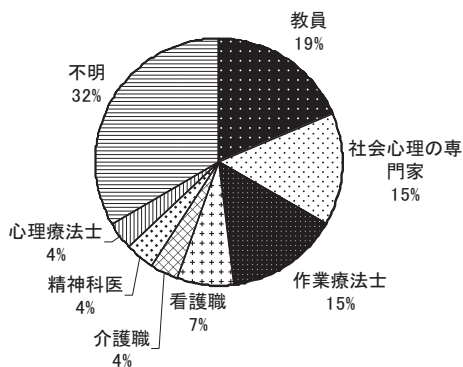


図 2 リーダーの職種

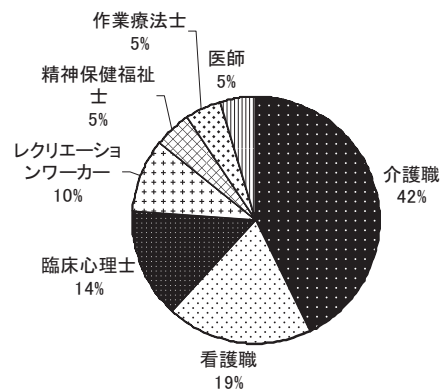


図 3 コリダー・記録・運営を担っていた職種

法士・医師がそれぞれ、5% となっていた（図 3）。

4. テーマ

回想法の運営において、時系列・非時系列、時系列と非時系列を合わせて行うかによって、テーマを選定するが、26 件の文献では、非時系列が 54% で最も多く、次いで時系列と非時

系列を合わせたものが 27%、時系列が 19% となっていた。時系列で行われていた中で、半構造的な形態をとっていたものが 60%、構造的な形態は 40% であった。

毎回の回想法開始前にリアリティ・オリエンテーションを組み合わせて行っていた文献が 3 件あった。

回想法の展開過程において、回想内容を促す

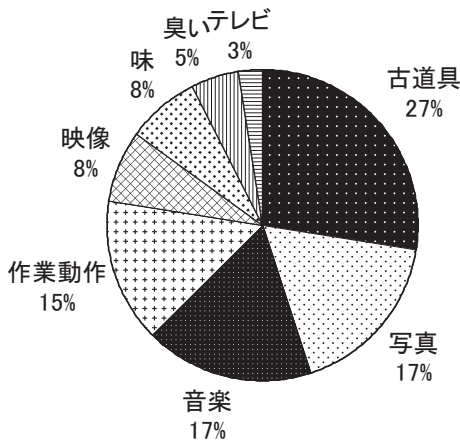


図4 刺激材料

ために、刺激材料を使用していると述べられていた文献が殆どを占めており、その中で刺激材料について記載されていたものをまとめると、古道具を活用していたものが全体の27%を占めており、音楽と写真を活用していたものが共に17%、作業動作を取り入れていたものが15%、映像を活用していたもの・味覚を刺激していたものが共に8%、臭覚を刺激していたものが5%、テレビ回想法（ビデオ）を活用していたものが3%となっていた（図4）。

回想法のテーマについては、テーマを項目毎に大きく分類すると合計28項目あり、子供の頃の遊びの思い出が14件と最も多かった。次いで多かったのは、子供の頃の行事で11件、花と懐かしい味が9件ずつ、小学校の思い出は8件、戦争については7件、ふるさと・家の用事・お手伝いがそれぞれ6件ずつで、1件のみに留まっていたテーマは、17テーマみられた（表3）。

5. 実践の場と対象者の属性

回想法実践の場は、大きく入所（院）と在宅に分けることができ、対象者の属性をみると、入所（院）者が56%で、在宅居住者は44%であった。入所（院）で最も多かったのは、介護療養型医療施設と介護老人福祉施設で、全体の

23%ずつを占めており、在宅で最も多かったのは、回想センターで全体の19%を占めていた（表4）。

6. 対象者の特性

(1) 対象者の特性

26件の先行研究における対象者の特性は、認知症高齢者が最も多く66%で、健常者（閉じこもりを含む）が30%、がん患者が4%であった。

(2) 海外文献を含む対象の広がり

我が国では、野村（1992）²⁸⁾が、認知症高齢者を含まない特別養護老人ホーム入所中の8名の高齢者を対象に実践し、参加者全員が指示的な相互交流を行い、グループ社交の場として楽しんだ。施設入居に対する否定的回想から肯定的回想へと変化が認められたと報告したのが、回想法研究の始まりである。

Butlerの提唱以後、高齢者を対象とした回想法実践は、欧米を中心に行われており、欧米では1980年代から、対象の特性に広がりを出す研究が盛んになっている。そこで、対象の特性については、欧米の文献も含めて、対象の特性と効果について示されている文献について、年代を追って整理していく。

精神疾患を有する患者に関しては、Lesser（1981）²⁹⁾が、精神疾患を有する6名の入院患者を対象に実践し、テーマに沿った積極的な参加が促進され、目的を理解することが難しい参加者も回想法参加の目的を理解し、全員が楽しく参加できたと報告し、Vineyet（1989）³⁰⁾は、精神的疾患を有する40名の在宅で居住する高齢者を対象に、面接による回想法を実践し、面接が進むに連れ、過去の喪失体験などの否定的な回想が統合され、肯定的な回想へと変化していったと述べている。

認知症を有する高齢者に関しては、Baines（1987）³¹⁾らが、老人ホームに入所する認知症高齢者15人を対象に、リアリティ・オリエンテーション（RO）を取り入れた回想法を実践

表 3 テーマの項目・件数・具体的なテーマ

テーマ(項目)	件数	具体的なテーマ名
遊び	14 件	子どもの頃の遊び・遊び・昔の遊び・遊びの思い出・しゃぼん玉・双六・お手玉、風船
行事	11 件	子どもの頃の行事・行事・子供の頃の季節毎の行事や思い出・遠足・鯉のぼり・盆踊り・七夕・おひなさま・クリスマス・お正月・花火
花	9 件	こすもす・梅の花・紅葉・紅葉(落ち葉)・故郷の花・桜・花・きんせんか・神社で花見
懐かしい味	9 件	木の実・やまいも・さつまいも・秋の味覚(薩摩芋、栗)・季節の和菓子を用いた感覚刺激・におい、食べ物・懐かしい味・漬け物
小学校	8 件	小学校の思い出・小学校・小学生の時
戦争	7 件	太平洋戦争・戦争の始まるころ・戦争中の体験・戦争体験・戦争・戦後の暮らし・戦後
家事	6 件	洗濯・洗濯仕事・昔の仕事や家事の動作・雑巾縫い・家で飼っていた家畜
ふるさと	6 件	ふるさとの話・ふるさと・日本地図を用いた故郷の名産品や思い出・出身地
お手伝い	6 件	お手伝い・手伝い・お使い
食事	5 件	ご飯炊き・お米をとぐ・ご飯炊きの思い出・食事支度・食事の支度
歌	5 件	懐かしい曲・音楽・歌・音楽と回想・懐メロ
家族	5 件	両親、兄弟・父親の子育て・家族・家族や家の思い出
趣味	4 件	趣味
お盆・お彼岸	4 件	お盆・お彼岸
仕事	4 件	仕事・仕事等・私の仕事・初任給
青春時代	3 件	青年時代・青春時代の思い出
ことわざ	3 件	ことわざ
子供時代	3 件	子供の頃の思い出・子供の頃・子ども時代
服装	3 件	子供の頃の服装・服装・着物
稲刈り	3 件	田植え・稲刈り・米の収穫期(稲穂)
おやつ	3 件	おやつ
運動会	2 件	運動会・運動会(鉢巻)
夏	2 件	夏の日の思い出・夏休み
祭り	2 件	まつり・祭日の過ごし方や意味
結婚	2 件	結婚、子育て・結婚
伝えたいこと	2 件	子どもたちに伝えたいこと・若者に伝えたいこと
音	2 件	音刺激(・小川の音・小鳥のさえずり・豆腐屋さんのラッパ・包丁で野菜を刻む音・でんでん太鼓・電車が通り過ぎる音)・音
その他 (テーマとして 1 件のみ)	17 件	明治時代・関東大震災・東京オリンピック・虫かご作り・学校教育、今昔・学生時代・昔からの家庭常備薬、マッサージ・輝いていた頃の話・銭湯の思い出・旅・思い出に残る言葉・映画・乗り物・髪型・雨の日・蛍・蛙・魚

表 4 実践の場と対象者の属性

n=26 件

実践の場	対象者の属性	研 究 者	割合 (%)
病院 (病棟)	入院者	安藤 (2005)	4
病院 (外来)	通院者	茂木・三浦・金山・桑島他 (2006)	4
介護療養型医療施設	入院者	黒川 (2002)、佐々木・上里 (2003)、植杉・上田・村方 (2005)、佐藤・細川・田高・酒井他 (2005)、黒川 (1995)、山村 (2006)	23
介護老人福祉施設	入所者	野村 (1992)、橋本・鈴木・紺野ら (2005)、野村 (2004)、高橋・筒井 (2002)、野村 (1993)、野村 (2006)	23
介護老人保健施設	入所者	森川 (1999)、佐藤・細川・田高・酒井他 (2005)	8
デイケア	通所者	花岡・西村・新宮 (2001)、内野・高橋・野村他 (2000)	8
高齢者通所施設 (宅老所)	通所者	軸丸・藤田・尾原 (2006)	4
回想センター	地域在住高齢者	森・来島・小島 (2003)、梅本 (2006)、梅本・中島 (2006)、梅本 (2004)、遠藤 (2003)	19
在宅 (訪問看護)	在宅 (利用者と家族)	新田・神田・芦田他 (2002)、野村 (2002)	4
大学	大学生	今野・植杉 (2003)	4

し、行動の改善が認められたと報告し、同年に、Goldwasser (1987)³²⁾らは、認知症高齢者の中でも、言語的コミュニケーションが可能な 27 人に対して実践し、情動的側面に一時的な改善が認められたと述べている。我が国では、野村 (1993)³³⁾が、特別養護老人ホームに入居している認知症高齢者 8 名に実践し、その効果として、比較的軽度の認知症高齢者の方がより肯定的な変化が大きかったと報告している。

地域在住の健常高齢者に関しては、Sherman (1987)³⁴⁾が、104 人の在宅健常高齢者を対象に对照群を設けて実践し、実験群は对照群に比べ、否定的な回想を回避せず包括的で、深い回想を生じる傾向がみられ、回想の統合度に有意差があると報告し、Haight (1988)³⁵⁾は、在宅健常高齢者 60 人を対象に对照群を設けて実践し、心理的健康や人生満足度に有意な改善が認められたと示している。我が国においては、遠藤 (2003)³⁶⁾が、在宅で生活する高齢者 (健常高齢者群 9 名、閉じこもり群 9 名、軽度認知症群 8 名) に実践し、短期効果として会話量の増加、社会性・社交性の改善、抑うつ症状の改善がみられ、認知機能は有意に改善されたと報告

している。同年に、森・来島・小島 (2003)³⁷⁾らは、65 歳以上の在宅健常高齢者で、介入群 9 名に对照群 8 名を設け実践し、外出状況や I-ADL、SF 36 に改善がみられ、閉じこもりの予防や改善、心理社会機能の維持、向上という点において効果が認められたと述べ、梅本 (2004)³⁸⁾は、ボランティア活動をしている在宅健常高齢者の介入群 10 名に、对照群 10 名を設定し実践し、介入群では参加意欲、積極性、喜び・楽しみなどの満足度、認知機能に有意な改善がみられ、認知機能に及ぼすプラスの影響や QOL の改善があることを報告している。

Rickrel (1989)³⁹⁾は、終末期にあるすべての年代の人々に、回想法は効果的な技法であると述べ、終末期の人々が残された人生の中で、ゴールを設定する過程において回想法は役立つと、終末期の人の自尊感情強化に重大な意味をもつと報告している。我が国では、安藤 (2005)⁴⁰⁾が、74 歳の女性のガン患者に回想法を、個別面接にて実践し、日常生活における行動範囲が広がり、抑鬱、無気力感が改善され、回想法は有効だったと報告し、終末期の人々に対する回想法の効果について述べている。

手術前の患者に関しては、Rybarczyk & Auerbach (1990)⁴¹⁾が、24 時間以内に手術を控えた 104 人のあらゆる世代の男子を対象に回想法を実践した。その効果として、あらゆる世代で手術前の不安が軽減し、特に高齢期になるほどその効果は高かったと、手術を受けることによる一時的な不安感に対しても、回想法の効果があると報告している。

野村 (2002)⁴²⁾は、自宅において、要介護高齢者とその家族 (妻) に対して夫婦別々に回想

表 5 効果の評価時期 (重複回答有り)

n=42

評価測定時期	件数(件)	割合(%)
介入前と介入直後	17	40
介入前・回想法介入中・介入直後	2	5
介入前・介入直後・介入後 3 ヶ月	1	2
介入直後のみ	2	5
毎回の観察記録も合わせて実施	13	31
毎回の観察記録のみ	7	17

表 6 評価尺度の種類と使用件数 (複数回答有り)

評価尺度の種類	件数	評価尺度の種類	件数
観察記録	16 件	HDS-R (改訂長谷川式簡易知能評価スケール)	6 件
Mini-mental-state-Examination (MMSE)	5 件	MOSES (モーゼススケール・高齢者用多元観察尺度・認知症高齢者日常生活行動観察尺度) Multidimensional Observation Scale for Elderly Subjects	5 件
ベンダーの継続記録表	4 件	バウムテスト	4 件
SKT (認知機能テスト)	4 件	抑うつ評価 Geriatric Depression Scale (GDS)	4 件
MMS	3 件	アンケート	3 件
日常生活の様子観察	2 件	QOL 評価 (MOS Short Form 36 Health Survey (SF 36))	3 件
Zarit 介護負担感尺度	2 件	感情プロフィール尺度 (POMS)	2 件
VAS	2 件	高齢者行動評価表	2 件
生活健康スケール	1 件	ローゼンバーグの自尊心尺度	1 件
主観的幸福感	1 件	死の不安感尺度 (DAS)	1 件
語流暢性検査	1 件	Cognitive Abilities Screening Instrument (CASI)	1 件
感情イメージ尺度	1 件	改訂版 PGC モラール・スケール	1 件
数唱	1 件	脳波の快適度の測定	1 件
N 式 N-ADL (西村式)	1 件	手段的 ADL (I-ADL) (日常生活動作能力評価尺度)	1 件
相互関係表	1 件	Clock-Drawing-test (CDT)	1 件
心の健康 (MH)	1 件	閉じこもり指標	1 件
活力 (VT)	1 件	HDS (長谷川式簡易知能評価スケール)	
NM 式 (N 式老年者用精神状態尺度・NM スケール・認知症高齢者日常生活における精神機能)	1 件	全体的健康感 (GH)	1 件
自己評価抑うつ尺度 (SDS)	1 件	Trail Making Test Part A (TMT-A)	1 件
うつ病評価尺度 (CES-D)	1 件	東大式観察評価スケール	1 件

法を実践し、介護者である妻から、「今までにない開放感を覚えた。自分の中に溜まっていたものが溶けたような気がする」という言葉が聞かれたと、家族介護者の効果について示している。新田・神田・芦田（2002）⁴³⁾らも、要介護高齢者とその家族（妻）に対して、夫婦一緒に実践し、意図的に回想法を用いることで意欲が増し「居がい」感の向上に繋がるという方向性を得ることができ、夫婦一緒に実施することで、夫婦の関係も円滑となり各々が良い方向に

転じる一手段となりうることがわかったと報告している。

今野・上杉（2003）⁴⁴⁾らは、大学生 14 名を対象として、音刺激（小川の音・小鳥のさえずり・包丁で野菜を刻む音など）による回想法を実践し、抑鬱・落ち込み群に効果がみられ、抑鬱や気分の落ち込みの軽減に有効であり、緊張・不安についても、緊張や不安の軽減に有効で、快適度に大幅な上昇がみられ、脳の快適な活動を促す効果をもっていることが示唆され、感情

表 7 評価尺度と効果の報告

	評価尺度の種類	効果の報告	研究者
認知機能	CASI	介入直後に上昇傾向がみられ、介入後 3 ヶ月で介入前の水準以下に戻った	橋本ら（2005）
	HDS	若干の肯定的変化有り 肯定的変化あり	野村（1993） 黒川（1995）
	HDS-R	肯定的変化あり	遠藤（2003）
	MMS	低下 下位項目に有意な改善	森川（1999） 佐々木ら（2003）
	MMSE	上昇 6 名中 4 名が得点増加	遠藤（2003） 山村（2006）
	SKT	改善（記憶力・注意力） 改善	梅本（2004, 2006） 遠藤（2003）
	東大式観察評価スケール	4 名比較的安定、1 人は激減、1 人は激増	山村（2006）
抑鬱	CES-D	若干の肯定的変化有り 肯定的変化あり	野村（1993）
	GDS	改善	茂木ら（2006）
	SDS	得点低下し改善	安藤（2005）
感情	POMS	得点有意に低下	高橋ら（2002） 今野ら（2003）
	バウムテスト	樹木拡大や果実増加 バウムのサイズの増大や統一感 樹木サイズの拡大枝数の増加 改善	橋本ら（2005） 佐々木ら（2003） 山村（2006） 安藤（2005）
QOL	SF 36	有意に改善 有意に改善 有意に改善	森ら（2003） 遠藤（2003） 梅本（2004, 2006）
	VAS	改善	梅本（2004, 2006）
行動	I-ADL	改善	森ら（2003）
	N 式	改善	内野ら（2000）
	MOSES	有意に改善 下位尺度が改善	黒川（1995） 遠藤（2003）
回想内容	ペンダーの継続記録表	有意な改善	梅本（2004, 2006）

イメージを喚起しやすく、過去の記憶が内包している懐かしさへの接近を促進したと報告している。

以上のように、回想法の実践研究における対象の特性は、年々その幅に広がりを見せ、効果が報告されている。

7. 効果の測定

(1) 評価時期

回想法の効果を確認するための評価時期については、回想法介入前と直後に行っていた者が、最も多く 40% を占めており、回想法介入前・介入中・介入直後が 5%、回想法の介入前と介入直後、そして介入後 3 ヶ月経過してから行っていた者が 2%、介入直後のみが 5%、毎回の観察記録も合わせて実施していた者が 31%、毎回の観察記録のみが 17% となっていた (表 5)。

(2) 対照群の有無

回想法の効果を確認する評価において、対象群の設定を行っていた者は 24% に留まり、対象群の設定を行っていない者が 76% にのぼっていた。

(3) 評価尺度と使用件数

回想法実践による効果を測定するために用いられていた、評価尺度の種類とその使用件数について表 6 にまとめた。評価尺度の種類は合計で 40 種類に及んでおり、1 件のみしか使用されていない評価尺度が 24 種類にのぼり、1 件の調査で複数の尺度を使用しているものが殆どを占めていた。

使用されていた評価尺度の種類の中で、上位 4 項目をみると、最も多かったのは、会話・行動の観察記録が 16 件で、次いで、改訂版長谷川式簡易知能評価スケール (HDS-R) の 6 件、続いて、Mini-mental-state-Examination (MMSE) と高齢者用多元観察尺度 (MOSES) が 5 件、4 番目に多かったのが、バンダーの継続記録表、SKT (認知機能テスト)、パウムテスト、抑うつ評価 (GDS) で、それぞれ 4 件となってい

た。

(4) 効果が報告されていた評価尺度

使用されていた評価尺度の中で、効果が示されなかった評価尺度も多く報告されていた。その中で、効果が示されていた評価尺度とその効果について表 7 にまとめた。評価尺度を使用した調査結果から、認知機能、抑鬱、感情、QOL、行動、回想内容の広がりには効果があることが示されていた。

IV 考 察

1. 回想法実践

回想法の実践報告は、クローズド・グループが全体の 81% を占めていた。オープン・グループの形態で回想法を実践した軸丸・藤田・尾原 (2006)⁴⁵⁾ は、参加者全員の調査報告ではなく、著名な変化があった 1 名についての質的な報告であった。このことは、調査を伴う実践においては、オープン・グループの形態はとりにくいためであると考ええる。

しかし、指定介護老人福祉施設においては、アクティビティ・サービスの一環としてさまざまな形で回想法を取り入れている。2006 年に兵庫県内の指定介護老人福祉施設における回想法実施状況についてアンケート調査を行った結果、67 施設のうち 17 施設、全体の 25% の指定介護老人福祉施設で回想法を実施していると回答があった。

指定介護老人福祉施設における回想法実践は、主に高齢者の生活の中の楽しみとして位置づけ、オープン・グループの形態をとって実践されている場合や、ケア提供時に意図的なコミュニケーションの一手法として実践されている場合が多かった。このように、回想法は対象に対して、介入者が意図的に関わりを持とうとする場合、いつでも、どこでも、誰でも、実践が可能な介入手段であると思われる。そのため、調査研究を伴わず、ケアの一環として実施されているケースが多いと思われる。

しかし、高齢者の入所施設の場合、ケアの質

の評価が積極的に行われていないケースも多いことから、意図的に介入する場合、最小限の評価尺度を用いて、評価を実施していくことで、ケアの評価に実施に繋がることから、今後は、評価の実施が望まれると考える。

また、家族介護者についての実践報告はあるものの、就労している介護者の介護負担感については、黒川（1995）⁴⁶⁾が、老人病院精神科に入院中の認知症高齢者を対象に実践した報告の中で、スタッフへのアンケートの回答から、全員が回想法に参加してよかったと回答し、患者、スタッフとのコミュニケーションと理解を深める有意義な体験として受け止められたと報告しているに留まっていた。そのため、入所（院）施設において実践される場合、就労しているスタッフについての介護負担感への効果についても、調査研究をすすめていくことが必要であると考えられる。

さらに、ほとんどの回想法実践において、毎回のテーマに応じて、テーマに即した刺激材料が活用されていた。佐藤・細川・田高・酒井ら（2005）⁴⁷⁾らは、HDS-R が軽度～中等度、CDR が1～2で、著しい視聴覚障害がない認知症高齢者を対象に、各テーマに応じた刺激材料を活用していた。例えば、しゃぼん玉では石鹸とストロー、米の収穫期では稲穂、銭湯の思い出では桶、秋の味覚では薩摩芋と栗などの刺激材料を活用し、回想の刺激材料によって、ほとぼしり出た過去の記憶を認知症高齢者が熱意を持って語ると述べていた。

刺激材料の活用について野村（2006）⁴⁸⁾は、施設入所中の認知症高齢者で自分の意志や気持ちが表現できる人を対象に実践し、刺激材を用いることによって、参加者の発言回数が多くなり、参加者同士の交流に繋がったと報告していた。

回想を促すテーマと刺激材料について、梅本（2007）⁴⁹⁾は、成長発達段階にかかわるものと、成長発達段階にかかわらないものに大別した上で、材料や道具は、参加者のより深い回想を促

す効果があり、言葉の刺激だけでは回想しきれない場合、材料や道具により五感が刺激され、わきあがる情報を促す効果があると示している。

このように、回想法実践に刺激材料を活用することは、認知症高齢者で言語的コミュニケーションが困難な場合でも、手続き記憶に働きかけることが可能で、その人らしさを取り戻す、ひとつのきっかけに成りうるのではないかと考える。

さらに、回想法のテーマの選定に合わせて、回想内容が広がっていくような、刺激材料を組み合わせて積極的に活用していくことは、認知症高齢者に限らず、対象者の五感に働きかけることが可能となり、回想法実践による相乗効果が期待できると思われる。

2. 支援者としての姿勢

回想法を実践していた者の職種・保有する資格では、文献に記載がなく不明であったものが全体の32%を占めていたが、教員・社会心理の専門家・作業療法士・看護職・心理療法士・介護職及び医師と、保健・医療・福祉分野の多岐に渡る職種の者が、回想法の実践研究に取り組んでいた。このことから、多岐に渡る分野で、その活用が期待されていると思われる。

甲田・渡辺（2005）⁵⁰⁾は、職種が明確でない論文もあり、今後は職種を明記し、自らの職種における回想法の活用方法を、明確にしていく必要があると述べている。このように、職種による活用方法を整理していくことは、各領域での活用が容易になると考えるため、進めていく必要があると考える。それと同時に、多職種と協働し、チームを組んで支援を展開していくことが、どの分野でも望まれているため、多職種と協働し実践を進めていく中で、研究成果も協力して積み重ね、双方で検討していくことが必要であると考えられる。

また、回想法実践は、在宅居住者、入所（院）者に対して、回想法センター・自宅・病

院・介護老人福祉施設・介護老人保健施設・デイケアなどさまざまな場所で行われていた。このことから、回想法が、いつでも・どこでも・誰でも・誰に対しても、その目的に応じて提供できる支援であると思われた。しかし、いつでも・どこでも・誰でも・誰に対しても提供できる支援であるからこそ、その効果を熟知し、実践目的を明確にした上で、実践することが必要であると考ええる。

回想法の実践においては、実践する支援者（リーダー・コリーダー）の力量が大きく影響していることも考えられる。このことについて、梅本（2007）⁵¹⁾は、リーダーの経験や力量の違いを重要な因子として考慮する必要がある、回想法の効果がリーダーの力量に影響を受けるとしている。回想法の実践においては、さまざまな対象に、さまざまな場所で実践が可能であるが、その効果を得るためには、目的を明確にした上で、支援者としての経験を積み、回想法実践能力を身につけた上で、実践していくことが望まれると考える。

また支援者について、新田・神田・芦田（2002）⁵²⁾らは、回想法活用過程で大切な事は、相手を尊重し相手の内的世界に心を向けようとする我々の姿勢であると述べている。このように、回想法に関わる支援者は、ただ単に懐かしい時間を共に過ごすだけではなく、相手を尊重し、回想内容として表出された内容を、傾聴・受容・共感し、対象者の回想を引き出していけるように、関わっていくことが大切であると考ええる。

3. 対象者の広がり

対象者の特性については、Butler の提唱以後、さまざまな取り組みが実践されており、対象の特性に広がりが見られた。1980 年前半に精神疾患を有する患者、1980 年代後半に認知症高齢者、地域在住の健常高齢者、全ての世代の終末期患者の効果が報告され、1990 年代は、全ての世代の手術前患者、2000 年代に入

り、家族介護者、一般の大学生への、回想法の効果が示されていた。

今野・上杉（2003）⁵³⁾らが、報告していた音刺激による回想法の効果から、高齢者だけでなく、一般の健常な青年期においても、自己の経験がもたらす懐かしさが、感情に働きかける効果があることがわかった。このことから、あらゆる世代の健常な人においても、回想法が有効であることが理解できた。

これらの先行研究の報告で示されていた対象以外にも、あらゆる世代が、回想法の対象となり、その効果が期待できることから考えると、人生の途中で障がいを受けた人や、社会の中で不適応な状態に陥っている人、不登校や引きこもりで悩んでいる若年者に対しても、回想法の効果は期待でき、回想法を実践していくことで、精神的安定が促され、自信を取り戻す機会になるのではないかと考えられた。

また、団塊の世代が定年を迎え、今後さらに高齢化が進んでいく中で、介護予防を視野に入れた取り組みとしても、回想法の活用が期待できるのではないかと考える。例えば、高齢者が生涯教育の一環として回想法実践能力を身につけ、回想法の支援者となり、コミュニティの中で、実践していくことも可能ではないだろうか。また、シルバーハウジングなどでの余暇時間の過ごし方の 1 手段として、回想法は活用できるのではないかと考える。

さらに、介護負担感が強い家族介護者や、施設・病院などで勤務する介護者にとっても、回想法実践能力を身につけ、支援者として介入していくことで、介護負担感の軽減に繋がる、回想法の効果は期待できると考える。

以上のように、回想法実践によりもたされる効果から、対象の特性は限りなく拡大していく可能性を秘めていると思われる。しかし、回想法実践による効果を高めるためには、実践により期待される効果から、対象の特性に合わせた実践目標を明確にし、回想法の実践方法について充分検討した上で、取り組んでいくことが必

要であると考える。

4. 効果測定

効果測定について吉岡（2000）⁵⁴⁾は、尺度を使用しての研究は少なく、今後詳細な検討が必要であると述べており、志村・唐澤・田村（2003）⁵⁵⁾らは、回想法の一貫した効果を求めることが重要であり、効果を検証していく方法について、多彩な分析手法を検討し、実証的な研究を重ね、回想法の有用性を明らかにしていくことが必要であると示している。このように、回想法実践に伴う効果測定については、不十分な点が指摘されている。

本稿においても、26件の先行研究で用いられていた評価尺度の種類は、研究者によってさまざまで、使用されていた評価尺度の種類合計数は40種類にのぼり、1件のみしか使用されていない評価尺度が24種類あり、1回の調査で数種類の評価尺度を使用していた。さらに、評価尺度を使用した文献でも、その結果が明確に示されていない文献もあった。

効果が示されていた文献からは、認知機能、抑鬱、感情、QOL、行動、回想内容の広がりにも効果があることがわかった。これらの効果を、項目毎に分類すると、①認知機能面、②精神機能・感情面、③身体機能・行動面の3点に分類することができると考え、その内容と共に表8に示した。

表8 回想法効果の分類と内容

効果の分類	効果の内容
認知機能面	注意力・記憶力の改善 問題行動・怒り・敵意の減少
精神機能・感情面	抑鬱・無気力・落ち込みの改善 参加意欲・喜び・楽しみが増す 疲労感の軽減
身体機能・行動面	引きこもり・全体的健康感・I-ADL・ 身体の痛みの無さが改善 活動の積極性・他者との交流が増える 外出状況・対人コミュニケーション活発 身体機能向上

評価尺度を数種類用いて、実践の評価を行う場合、その効果が確認できないことは、調査対象となる対象者に多くの負担を強いてしまう。そのため、実践目的に応じた効果を検証するための評価尺度を、先行研究を参考に、充分検討し、活用していくことが望まれると考える。

中山・山中（2006）⁵⁶⁾らは、主観的尺度に加え、客観的データの分析、会話内容などの質的な変化に関する分析も同時に行っていくべきであろうと述べており、中山・山中（2006）⁵⁷⁾らも、観察記録について、量的評価と共に、質的評価を実施し、双方に妥当性が得られるように取り組んでいく必要があると述べている。本稿では、会話内容などの質的な変化に関する、会話・行動の観察記録を行っていたのは、26件中16件に留まっていた。

実践中の回想内容の発展性や、実践中の行動の変化は、対象者の回想法の効果の確認だけではなく、毎回の実践における評価材料になると共に、効果的な会を開催していくためにも、回想法実践に伴う評価においては、量的評価と共に、会話の内容や行動の変化などの質的評価も必要不可欠であり、双方を実施した上で、その結果を分析・検討していくことが重要であると考ええる。

評価の時期については、回想法介入前と直後に、評価を行っていた者が17件で最も多かった。しかし、回想法の効果を検証していくためには、一時的な回想法の効果測定だけではなく、長期的な効果測定も必要であると考ええる。

橋本・鈴木・紺野・大石（2005）⁵⁸⁾らは、介護老人福祉施設入所中の認知症高齢者に週1回、3ヶ月間介入し、介入前、介入直後と介入後3ヶ月経過してから評価を行っていた。介入後3ヶ月の評価では、参加者の多くでCASIの成績は介入前の水準以下に戻っており、認知症高齢者の残存能力を賦活したものの一時的であったと報告していた。しかし、3ヶ月経過した後でも、職員から、生活活動の観察の中で、明らかにQOLが向上したと、感想が聞かれたと

述べていた。

このことから、回想法の評価は、認知機能だけではなく、QOL に関する評価尺度も活用し、長期的に調査を行い、その効果の持続性についても検証していくことが必要であると考ええる。さらに、回想法によって効果が示されていた、認知機能面、精神機能・感情面、身体機能・行動面についても、継続した効果測定を行い、賦活化された機能がどの程度維持されていくのかを検証していくことが重要であると考ええる。

さらに、介入後、時間の経過と共に、回想法の効果が持続しないのであれば、持続しない部分については、回想法をきっかけとして賦活化された機能が維持・向上していけるような支援が必要になってくると考える。例えば、対象者の最も輝いていた時期に関連した役割を担って貰うなど、その人らしさが発揮できるような、個々に応じた支援の展開が必要であろうと考える。

また、評価において、対象群の設定を行っていた者が 24% で、対象群の設定を行っていない者が 76% にのぼっていたが、特に同じ環境のもとで生活を送っている入所（院）者を対象とする場合、対照群を設けた方が、回想法そのものの効果が明確になるのではないかと考える。

V 結 論

回想法の先行研究における文献をもとに整理した結果、支援者・対象者・評価方法・賦活化された機能の大きく 4 点について展望を導いた。

1 点目の回想法実践を行う支援者においては、支援者としての力量が大きく影響することから、回想法の効果を熟知した上で、テーマを選定し、刺激材料を工夫して活用すると共に、対人支援能力に磨きをかけ、実践することが望まれる。また、介護スタッフの介護負担感の調査をすすめ、回想法導入による介護負担感の軽

減を検証することが必要である。

2 点目の対象者においては、回想法実践によって期待される効果から、高齢者だけでなく、あらゆる世代の人を対象に、実証研究を積み重ね、分析・検討していくことが必要である。

3 点目の評価方法では、実践目的に応じた評価尺度を選択し、調査対象者の負担感の軽減を図る必要がある。そして、回想法の効果を検証していくためには、一時的な回想法の効果測定だけでなく、認知機能面、精神機能・感情面、身体機能・行動面についての、継続した長期的な効果測定による、回想法の有効性の検証が必要である。また、同じ環境のもとで生活を送っている入所（院）者を対象とする場合、対照群を設けることが望まれる。

4 点目は、賦活化された機能がどの程度維持されていくのかを検証し、回想法をきっかけとして賦活化された機能が維持・向上していく支援の展開についても検討が必要である。

回想法は、我が国で最初の論文が報告されてから、わずか 15 年である。回想法実践によって検証されていない面も多く、今後、回想法の実践研究を積み重ね、その効果を検証し、蓄積させていくことで、対人支援の 1 手法として確立していくと思われる。

最後に、人間には誰でも輝いていた時代がある。人として生きている限り、誰もが持ち備えている過去の記憶に焦点を当て、人生の統合を目指していく支援は、対人支援として、全ての人を対象に無限の可能性を秘められていると思われる。

謝辞

本稿作成にあたって、助言・指導を頂きました武田建教授に深く感謝申し上げます。

引用文献

- 1) Butler, R. N.: The Life Review, An Interpretation of Reminiscence in the Aged. *Psychiatry*, 26, 65-75, 1963.
- 2) 野村豊子：回想法グループの実際と展開－特

- 別養護老人ホーム居住老人を対象として一，社会老年学，35，32-45,1992.
- 3) 野村豊子：痴呆性老人への心理・社会的アプローチ回想法およびリアリティ・オリエンテーションを中心として一，OT ジャーナル，27，685-693，1993.
 - 4) 黒川由紀子：痴呆老人に対する心理的アプローチ老人病院における回想法グループ，心理臨床学研究，13，2，169-179，1995.
 - 5) 森川千鶴子：重度痴呆性高齢者のグループ回想法が QOL にもたらす効果，看護学総合研究，1(1)，61-67，1999.
 - 6) 内野聖子・高橋絹子・野村豊子他：痴呆性高齢者の回想法の効果，高齢者のケアと行動科学，7，1，27-36，2000.
 - 7) 花岡秀明・西村良二・新宮尚人：高齢者に対する回想法の有効性の検討，第35回日本作業療法学会誌，20，1，332，2001.
 - 8) 黒川由紀子：痴呆性疾患を有する男性患者に対する回想法グループの試み，カウンセリング研究所紀要，25，36-45，2002.
 - 9) 遠藤英俊：新しい回想法，分子精神医学，3，1，71-76，2003.
 - 10) 今野義孝・上杉 喬：懐かしさの感情体験に及ぼす動作法による快適な心身の体験の効果ー脳波の快適度と感情イメージ尺度による検討ー，仏教大学人間科学部 人間科学研究，25，63-72，2003.
 - 11) 森 明子・来島修志・小島恵美他：地域高齢者に対する介護予防事業への関わりー回想法を用いてー，作業療法，22，393，2003.
 - 12) 佐々木直美・上里一郎：特別養護老人ホームの軽度痴呆高齢者に対する集団回想法の効果の検討ーMMS、行動評価、バウムテストを用いてー，心理臨床学研究，21(1)，80-90，2003.
 - 13) 梅本充子：恵那市回想法スクール効果測定調査報告書，恵那市明智思いめぐり(回想法)事業報告書，岐阜県恵那市，65-75，2004.
 - 14) 野村勝彦：痴呆性老人に対するグループ回想法の研究，福岡女学院大学大学院紀要：臨床心理学：創刊号，37-41，2004.
 - 15) 植杉光代・上田裕美子・村方靖典：介護療養型医療施設における認知症高齢者へのグループ回想法の実施，臨床看護，31(8)，1231-1234，2005.
 - 16) 佐藤弘美・細川淳子・田高悦子・酒井郁子他：痴呆性高齢者のグループ回想法において家族とケアスタッフが捉えた意味ー回想場面の映像からー，石川看護雑誌，2，15-23，2005.
 - 17) 橋本竜作・鈴木 淳・紺野佳織・大石陽子他：福祉施設入所アルツハイマー病患者に対する回想法グループワークの効果，老年精神医学雑誌，16(3)，337-346，2005.
 - 18) 梅本充子：地域における回想法の展開，月刊ガバナンス，26-29，2006.
 - 19) 梅本充子・中島朱美：介護予防のための地域在住高齢者に対する回想法の有用性の研究ー新たな回想法手法(懐かしい音の回想)を試みてー，日本介護福祉学会ー，95，2006.
 - 20) 山村容子：認知症高齢者への回想法グループの評価について，九州神経精神医学，52，2，106-114，2006.
 - 21) 茂木七香・三浦久幸・金山由美子・桑島愛他：音楽と回想を用いた小グループでの思いで帳作りセッションAさんのナラティブの変化を中心にー，日本認知症ケア学会誌，5(2)，203，2006.
 - 22) 野村勝彦：認知症高齢者のグループ回想法実施上の課題，福岡女学院大学大学院紀要 3，67-72，2006.
 - 23) 野村豊子：痴呆の人のライフビューと家族のライフビュー，認知症ケア学会誌，1，9-12，2002.
 - 24) 高橋千寿・筒井裕子：不安の強い高齢者への短期回想法の介入ー回想類型と POMS を用いての分析，日本看護研究学会雑誌，25，3，96，2002.
 - 25) 新田栄子・神田昌子・芦田恵美子他：回想法を用いて「居がい」感の向上を図る援助を分析，地域 看護，33，12-14，2002.
 - 26) 安藤満代：がん患者に対する回想法に基づいた認知療法の有用性に関する研究，日本健康心理学会，18(2)，53-64，2005.
 - 27) 軸丸清子・藤田晶子・尾原喜美子：懐メロを媒体とした回想法の高齢者への応用と評価，看護・保健科学研究誌，6(3)，77-88，2006.
 - 28) 前掲2)
 - 29) Lesser J, Lazarus LW, Frankel R, Havasy S.: Reminiscence group therapy with psychotic geriatric

- patients, *The Gerontologist*, 21 (3), 291–296, 1981.
- 30) Viney LL, Benjamin YN, Preston C. : Mourning and reminiscence, Parallel psychotherapeutic processor for elderly people, *International Journal of Aging and Human Development*, 28 (4), 239–249, 1989.
- 31) Baines, S., Saxby, P. & Ehler, K., Reality : orientation and reminiscence therapy : A controlled cross-over study of elderly confused people, *British Journal of Psychiatry*, 151, 221–231, 1987.
- 32) Goldwasser, A. N., Auerbach, S. M. & Harkins, S. W. : Cognitive, affective and behavioral effect of reminiscence group therapy on demented elderly, *International Journal of Aging and Human Development*, 25, 209–222, 1987.
- 33) 前掲 3)
- 34) Sherman, E. : Reminiscence groups for community elderly. *The Gerontologist*, 27 (5), 569–572, 1987
- 35) Haight, B. K. : The therapeutic role of a structured life review ; Process in homebound elderly subjects. *Journal of Gerontology, Psychological Sciences*, 43 (2), 4–44, 1988.
- 36) 前掲 9)
- 37) 前掲 11)
- 38) 前掲 13)
- 39) Pickrel, J. : Tell me your story : Using life review in counseling the terminal ill, *Death Studies*, 13, 127–135, 1989.
- 40) 前掲 26)
- 41) Rybarczyk, B. D. & Auerbach, S. M. : Reminiscence interviews as stress management intervention for older patients undergoing surgery, *Gerontologist*, 30, 522–528, 1990.
- 42) 前掲 23)
- 43) 前掲 25)
- 44) 前掲 10)
- 45) 前掲 27)
- 46) 前掲 4)
- 47) 前掲 16)
- 48) 前掲 22)
- 49) 遠藤英俊監修・梅本充子著：地域回想法ハンドブック，河出書房新社，31–32, 2007.
- 50) 甲田 充・渡辺岸子：日本において試みられた回想法の現状—文献検討から看護における回想法を考察する—，新潟大学医学部保健学科紀要，8(1)，37–47, 2005.
- 51) 前掲 49)，67.
- 52) 前掲 25)
- 53) 前掲 10)
- 54) 吉岡久美子：高齢者の回想（法）に関する展望，九州大学心理学研究，139–49, 2000.
- 55) 志村ゆず・唐澤由美子・田村正枝：看護における回想法の発展を目指して：文献展望，長野県看護大学紀要，5, 41–52, 2003.
- 56) 中山 淳・山中克夫：認知症ケアにおける回想法，保健の科学，48(4)，254–258, 2006.
- 57) 前掲 56)
- 58) 前掲 17)